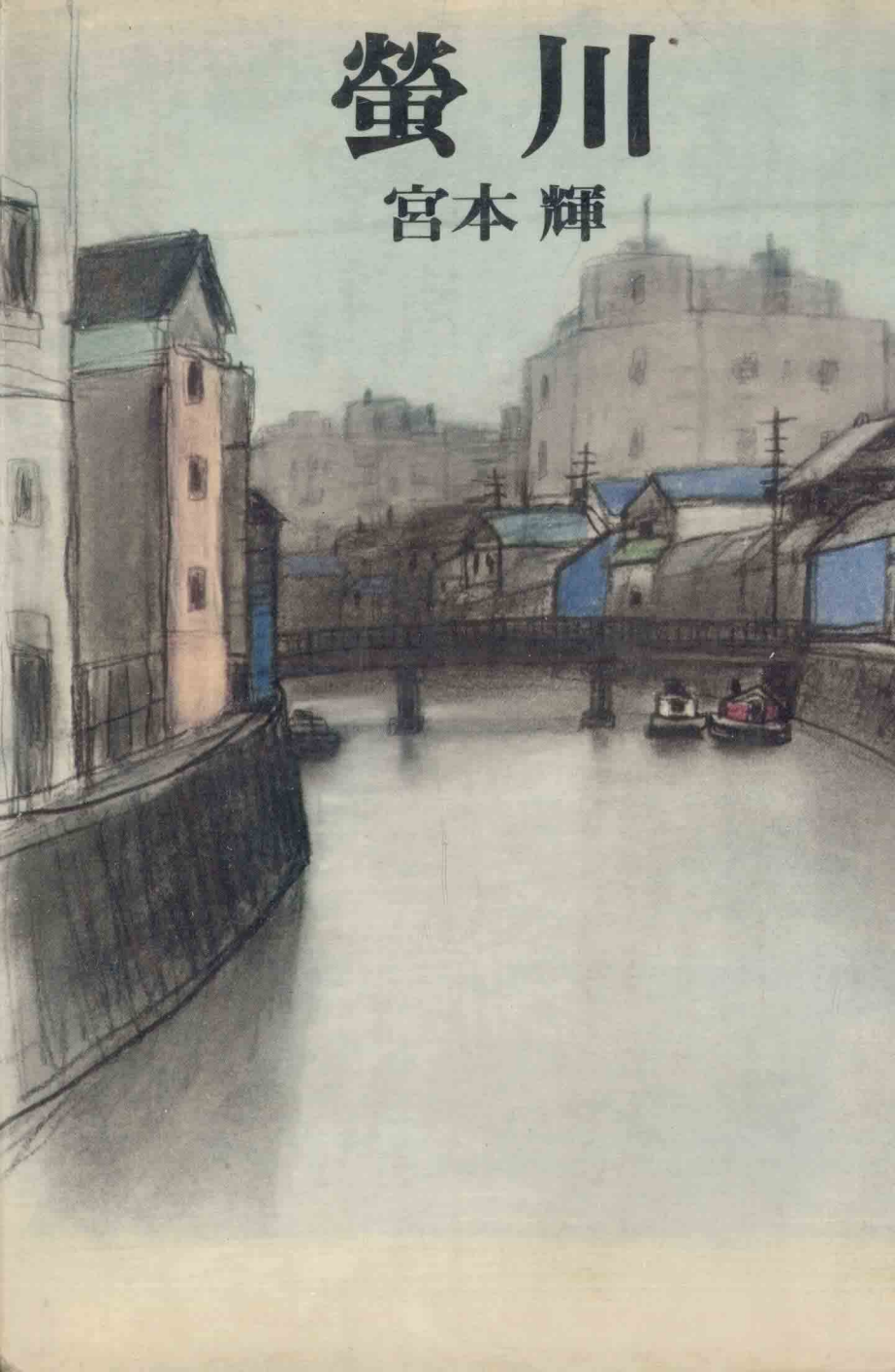
螢川

宮本輝



螢　川

宮本輝

筑摩書房

螢川

一九七八年二月十日第一刷発行
一九七八年二月二十日第二刷発行

著者　宮本輝

発行者　岡山猛

印刷　多田印刷
製本　和田製本

発行所　筑摩書房
東京神田小川町二ノ八
振替東京六―四一二三
電話東京二九一―七六五一

©宮本輝
一九七八

Printed in Japan　0093—80174—4604

目次

泥の河……5
螢川……93

裝幀　風間　完

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

螢

川

泥の河

堂島川と土佐堀川がひとつになり、安治川と名を変えて大阪湾の一角に注ぎ込んでいく。その川と川がまじわる所に三つの橋が架かっていた。昭和橋と端建蔵橋、それに舟津橋である。

藁や板きれや腐った果実を浮かべてゆるやかに流れるこの黄土色の川を見おろしながら、古びた市電がのろのろと渡っていった。

安治川と呼ばれていても、船舶会社の倉庫や夥しい数の貨物船が両岸にひしめき合って、それはもう海の領域であった。だが反対側の堂島川や土佐堀川に目を移すと、小さな民家が軒を並べて、それがずっと川上の、淀屋橋や北浜といったビル街へと一直線に連なっていくさまが窺えた。

川筋の住人は、自分たちが海の近辺で暮らしているとは思っていない。実際、川と橋に囲まれ、市電の轟音や三輪自動車のけたたましい排気音に体を震わされていると、その周囲から海の風情を感じ取ることは難しかった。だが満潮時、川が逆流してきた海水に押しあげられて河畔の家の

軒下で起伏を描き、ときおり潮の匂いを漂わせたりすると、人々は近くに海があることを思い知るのである。

川には、大きな木船を曳いたポンポン船がひねもす行き来していた。川神丸とか雷王丸とか、船名だけは大袈裟な、そのくせ箱舟のように脆い船体を幾重もの塗料で騙しあげたポンポン船は、船頭たちの貧しさを巧みに代弁していた。狭い船室に下半身を埋めたまま、彼等は妙に毅然とした目で橋の上の釣り人を睨みつける。すると釣り人は慌てて糸をたくりあげ、橋のたもとへと釣り場を移すのであった。

夏には殆どの釣り人が昭和橋に集まった。昭和橋には大きなアーチ状の欄干が施されていて、それが橋の上に頃合の日陰を落とすからであった。よく晴れた暑い日など、釣り人や通りすがりに竿の先を覗き込んでいつまでも立ち去らぬ人や、さらには川面にたちこめた虚ろな金色(こんじき)の陽炎を裂いて、ポンポン船が咳込むように進んでいくのをただぼんやり見つめている人が、騒然たる昭和橋の一角の濃い日陰の中で佇んでいた。その昭和橋から土佐堀川を臨んでちょうど対岸にあたる端建蔵橋のたもとに、やなぎ食堂はあった。

「おっちゃん来月トラック買うから、あの馬のぶちゃんにあげよか」

「ほんまか？　ほんまに僕にくれるか」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

店の入口から差し込む夏の陽が、男のうしろで光の輪を作っていた。男は昼過ぎになると、馬に荷車を引かせて端建蔵橋を渡ってくる。いつもやなぎ食堂で弁当をひろげ、そのあとかき氷を食べていくのだった。そのあいだ、馬は店先でおとなしく待っていた。

信雄はきんつばを焼いている父の傍へ行き、

「あの馬、僕にやる言うてはるわ」

と言った。母の貞子がかき氷に蜜をかけながら、ぎゅっと睨みつけた。

「ここの父子には冗談が通じまへんねんで」

馬が珍しくいなないた。

昭和三十年の大阪の街には、自動車の数が急速に増えつづけていたが、まだこうやって馬車を引く男の姿も残っていた。

「犬に猫、座敷にはひよこが三匹や。のぶちゃんよりお父ちゃんのほうが一所懸命になりはんねんから……。あげくに馬やて。いまでも、ほんまに飼うてもええなァぐらいに考えてる人ですねん」

男は大声で笑っている。

「冗談が通じんのはお母ちゃんのほうやで。なあ、のぶちゃん」

主人の晋平がそう言って信雄の手にきんつばを握らせた。またきんつばかと信雄は父を上目づかいで見た。

「きんつばばっかりもういらん。氷おくれェな」

「いややったら食べんとき。氷もやれへん」

信雄は慌てて頬張った。夏にきんつば焼いたかて売れるかいな——いつか母が言った言葉を心の中で叫んでみる。

「ここはあんたの便所やないでえ」

貞子が顔をしかめて表に出ていった。馬は習慣のように、店先のきまった場所に糞を落とした。

「いっつもすまんなあ……」

申し訳なさそうに叫ぶと、男は信雄を招き寄せた。

「わしのん半分やるさかい、匙持っといで」

一杯のかき氷を、信雄と男は向かい合って食べた。信雄は男の顔にある火傷のあとをそっと見た。左の耳が熔けたようになってちぎれていた。信雄は、おっちゃんの耳どないしたんと訊いてみたいのだが、言おうとするといつも体が火照ってくる。

「終戦後十年もたつ大阪で、いまだに馬車では稼ぎもしれてるわ」

「トラック買うてほんまかいな？」
晋平が男の横に腰かけて訊いた。
「中古やで。新車なんかよう買わんさかいなあ」
「中古でもトラックはトラックや。よう頑張りはったなあ。あんた働き者やさかい。これからがうんと楽しみや」
「働き者はあの馬や。いやな顔ひとつせんと、ほんまによう働いてくれたわ」
ビールの栓を抜くと、晋平は男の前に置いた。
「これはわしの奢りや。前祝いに飲んでいってんか」
おおきに、おおきにと言いながら、男は嬉しそうにビールを飲んだ。
「トラックで商売するようになっても、やなぎ食堂にはときどき顔出してや。わしがここに店開いて、その最初のお客さんがあんたやからなあ」
「そうや。まだここらに焼跡がごろごろ残ってるころやったなあ」
苺色の冷たさがきりきりと脳味噌に突きあがってくる。信雄は匙を口にくわえたまま、思わず身を捩らせた。慌てて食べるさかいやと言って、晋平は掌で信雄の口元を拭いた。
「のぶちゃんがまだお腹に入っとったで」

店先を掃除している貞子にも、男は話しかけた。
「ほんまに長いおつきあいや、あんたともなあ……」
貞子は馬と話しながら水の入ったバケツを差しだした。馬が水を飲む音と、遠くから聞こえるポンポン船の音が、蒸暑い店の中で混じりあっている。
いっぺん死んだ体やさかいと男は言った。
「ほんまにいっぺん死んだんや。そらまざまざと覚えてるでェ、あの時のことはなあ。真っ暗なとこへどんどこ沈んでいったんや。なにやしらん蝶々みたいなんが急に目の前で飛び始めてなあ、慌ててそれにつかまったひょうしに生きかえった。確かに五分間ほど息も脈も止まってた……わしをずっと抱いててくれた上官が、そない言うとった。死んだら何もかも終りやいうのん、あれは絶対嘘やで」
「もう戦争はこりごりや」
「そのうちどこかの阿呆が、退屈しのぎにやり始めよるで」
歌島橋まで行くのだと言って男は立ちあがった。何やら楽しそうであった。
「きょうは重たいもん積んでんねん。舟津橋の坂よう登るやろか……」
暑い日である。市電のレールが波打っている。

「のぶちゃん、幾つになったんや？」
馬の優しそうな目に見入りながら、信雄は胸を張った。
「八つや。二年生やで」
「そうか、うちの子ォはまだ五つや」
信雄は店先の戸に背をもたせかけて、男と馬を見送った。
「おっちゃん」
男が振り返った。ただなんとなく声を掛けたのであった。急に気恥しくなって、信雄は意味のない笑いを男に投げかけた。男も笑い、そのまま馬のたづなを引いて歩いていった。太った銀蝿が、ぎらつきながらそのあとを追っていった。
馬は舟津橋の坂を登れなかった。何度も試みたが、あと一息のところで力尽きるのである。馬も男も少しずつ疲れて焦っていく様子が伝わってきた。車も市電も道行く人も、みな動きを停めて、男と馬を見つめていた。
「おうれ！」
男の掛け声にあわせて、馬は渾身の力をふりしぼった。代赭色の体に奇怪な力瘤が盛りあがり、それが陽炎の中で激しく震えた。夥しい汗が腹を伝って路上にしたたり落ちていく。

「二回に分けて橋渡ったらどうや？」

晋平の声に振り返った男は、大きく手を振って荷車の後にまわった。そして荷車を押しながら、馬と一緒に坂を駈け登った。

「おうれ！」

馬の蹄がどろどろに熔けているアスファルトで滑った。信雄の頭上で貞子が叫び声をあげた。突然あともどりしてきた馬と荷車に押し倒された男は、鉄屑を満載した荷車の下敷になった。後輪が腹を、前輪がくねりながら胸と首を轢いた。さらに、もがきながらあとずさりしていく馬の足が、男の全身を踏み砕いていく。

「のぶちゃん、来たらあかんで」

晋平は倒れている男めがけて走っていき、とぼとぼ戻ってくると、電話で救急車を呼んだ。

「死んでないんやろ、なあ、大丈夫なんやろ？」

貞子は涙声でそう呟くと、店先にうずくまった。調理場の隅に丸めて立てかけてあった莫蓙を持ち、晋平はまた表に出ていった。

「信雄、中に入っといで」

貞子が呼んでいたが、信雄は動けなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com